



平成 29 年 9 月 8 日
一般社団法人日本地質学会

日本地質学会第 124 年学術大会(2017 愛媛)
「ようおいでたなもし, 四国地質お遍路の旅へ」

発表形態:説明会(9 月 8 日, 文部科学省記者会会見室にて 15:00 より. 会見後解禁)

発表先:文部科学省記者会, 愛媛県庁記者クラブ, 科学新聞社

概要:

1) 学術大会のご案内 (資料1)

2) 表彰

3) 行事のご案内

(1) 国際シンポジウム:東アジアの古生代古地理学[共催:日本古生物学会]

(2) 一般公開セッション

(3) 市民講演会「地質学を活用して地域イノベーションを共創しよう」

(4) 地質情報展 2017 えひめ

(5) 小さな Earth Scientist のつどい 第 15 回小, 中, 高校生徒「地学研究」発表会

4) 特筆すべき学術発表

(1) 熊本地震日奈久断層帯が過去に高頻度で活動し, 隣接区間も同時に活動した可能性の発見(宮下由香里ほか) (資料2)

(2) 首都の最重要機能に移転するなら, どこへ (趙 大鵬) (資料3)

(3) 南大洋の古海洋変動ダイナミクス研究の最近の進展 (池原 実) (資料4)

内容:

1) 日本地質学会第 124 年学術大会(愛媛 2017)を開催

開催日: 2017 年 9 月 16 日(土)~18 日(月)

会場: 愛媛大学(城北キャンパス)

ウェブサイト: <https://confit.atlas.jp/guide/event/geosocjp124/top>

上記 URL より発表プログラム等を閲覧できます。学術大会を取材希望の方は、事前(学会事務局)、もしくは当日(会場受付)申し出て下さい。

2) 表彰

一般社団法人日本地質学会では地質学に関する優秀な研究業績を修めた方や地質学の発展・普及による社会貢献の著しい方を顕彰しています。本年の受賞者は次の方々および団体です。

日本地質学会賞

受賞者: ウォリス サイモン会員(名古屋大学大学院環境学研究科)

対象研究テーマ: 構造岩石学と造山帯テクトニクス

日本地質学会国際賞

受賞者: Richard S. Fiske 氏(スミソニアン協会・国立自然史博物館)

研究テーマ: 海底噴火における水中火砕流の運搬堆積機構

日本地質学会柵山雅則賞

受賞者: 平内健一会員(静岡大学理学部地球科学科)

対象研究テーマ: 沈み込み帯と蛇紋岩のレオロジー

日本地質学会学会表彰

受賞者: 「ブラタモリ」製作チーム(日本放送協会)

表彰業績: 地質学の社会への普及

ほか

3) 行事のご案内

(1) 国際シンポジウム: 東アジアの古生代古地理学 [共催: 日本古生物学会]

日時: 9 月 18 日(月・祝) 8:45~11:45

会場: 第一会場(南加記念ホール)

世話人: サイモン・ウォリス*(名古屋大; swallis@eps.nagoya-u.ac.jp), マーク・ウィリアムズ(Leicester 大), 大路樹生(名古屋大)

内容: このシンポジウムは、特に古生代前半における東アジアの古地理学に関する専門家を一同に集め、議論することを目指している。その主たる対象は日本の地質であるが、東アジアの古地理学的進化を明らかにすることに関連し、複数の国々(例えば韓半島、タイ、ベトナム、中国など)からもたらされる最新の情報を発表することも目的としている。セッションで提供される方法としては主として以下の2つが中心となる 1) 最新の研究でもたらされた新たな結果と、今まで十分に明らかにされて

いる地域の要約からなる古生物学的情報, 2) 特に碎屑性鉱物のウラン-鉛年代に記録される地球年代学, である. これらは新たな研究の発表と従来の結果のレビューの両方から構成される. 三葉虫の研究は従来重要な情報源として使われており, このトピックは当セッションの重要な基盤であると考えている. 我々は初めて日本中の実質的な全三葉虫コレクションに基づく情報を集め, 最新の分析手法に照らしてその評価を行っている.

(2) 一般公開セッション

下記一般公開セッションを開催します.

T1. 文化地質学: 2014年に「地質学に新たな分野を提唱したい. 人類の文化・文明が地質とどのように関わってきたかを研究する学問分野『文化地質学』である.」と呼びかけて始めたトピックセッションの4回目. 文化・文明と地質の関わり, 人・社会の営みと地質の関わり, 観光資源としての地質など, 多様な研究成果の発表を予定.

R6. ジオパーク: ジオパークは, 貴重な地質・地形を中心とした各種自然・文化遺産の価値を地元の人が良く理解し保全しながら, 地域の教育や経済的振興をめざす事業である. 自然遺産の保全, ジオツアーのインタープリター, ガイドの育成に当たって, 地域の大学, 博物館, 研究所の研究者の協力は不可欠である. この観点から, 地質学会として, 問題点を整理し, ジオパークの質的向上への貢献に寄与したい. 様々な実践例の発表, 課題解決方法の提案など

OR. 日本地質学会アウトリーチセッション: 世話人: 星 博幸 (愛知教育大) ほか

研究成果を社会に発信する場として設けられたセッション. 地質学と関連分野を対象とし, 地域の地質や地学に関する研究紹介, 社会的に注目されている地質および関連トピックの研究紹介, 特定分野の研究到達点や課題の解説など.

【ポスター講演: 講演者による解説・説明付】 17日(日) 13:00-14:00, 16:00-17:00

場所: 愛媛大学ミュージアム

【口頭発表(T1のみ)】 17日(日) 8:45-11:45 会場 南加記念ホール

(3) 市民講演会 「地質学を活用して地域イノベーションを共創しよう」

日時: 9月17日(日) 13:30~15:30

参加費無料・事前申込不要

会場: 愛媛大学南加記念ホール(松山市文京3)

概要: 黒瀬川帯発祥の地を含む四国西予ジオパークが2013年に日本ジオパークに認定されてから4年が経ちました. それまでの活動やジオパークを中心とした地域活性化の取り組みや四国西予ジオパークの魅力などを分かりやすく解説する講演と, ここ30年以内に発生する確率が70%と評価されている南海トラフにおける巨大地震に着目し, その備えについての市民講演を行います.

講演予定:

「ジオの視点で地域を元気に！－四国西予ジオパークの取り組み－」

高橋 司（西予市城川支所長 元四国西予ジオパーク推進協議会 事務局長）

ジオパークは、地球の活動を学び、丸ごと楽しむことができる「大地の公園」です。生態系も文化も人の暮らしも、よく考えてみると地質や地形と密接につながっています。そんな視点で自分たちのまわりをもう一度見てみると、同じ景色も今までとは違って、より興味深く、また愛おしく思えてくることがあります。今回は、四国西予ジオパークでの取り組みや、バーチャルジオツアーを楽しんでもらうことで、硬いだけだと思われがちな地球科学を身近に感じてもらい、地球科学の進展がまちの元気づくりにもつながるということをご紹介しますと思います。

「南海トラフ巨大地震への備え」

高橋治郎（元愛媛大学教育学部教授）

1995年の兵庫県南部地震以来、西南日本も地震の活動期に入り各地で被害を伴う地震が頻発するようになった。そうした中、近未来には必ず発生する「南海地震」への備えや対策を国や地方自治体を挙げて行ってきた。この時の想定地震規模は、1707年の「宝永地震」であった。ところが2011年に発生した東北地方太平洋沖地震は予想をはるかに超えたマグニチュード9.0という巨大なもので、未曾有の災害をもたらせた。これを受け「南海地震」の規模を見直し、地震の想定規模をマグニチュード9.1とし、被害エリアを広げるとともに津波の波高もより高く見積もられた。こうして「南海トラフ巨大地震」像が具体化する一方、どうこの地震から人命や財産を守るかが行政のみならず地球科学を研究する我々の大きな課題となってきた。地震や津波発生メカニズムや地震発生周期、マグニチュードと震度など地震に関する情報を本講演をとおして市民と共有するとともに防災・減災について考えてゆきたい。

（4）地質情報展 2017 えひめ

愛媛県及び四国周辺の地質現象や地震、鉱山についてパネル、映像、標本を使って展示・解説する「地質情報展 2017 えひめ」を開催します。化石レプリカ作成などの体験学習コーナーなども用意し、実験や実演を通じて小学校入学前のお子さんからシニアまで、楽しみながら「地質」を皆さんにわかりやすく学んでいただけるイベントです。

日程：9月16日（土）～18日（月・祝）入場無料

16日（土）10:00～17:00

17日（日）10:00～17:00

18日（月）10:00～16:00（時間はいずれも予定）

会場：愛媛大学ミュージアム

主催：日本地質学会、産業技術総合研究所地質調査総合センター

問い合わせ先:

産業技術総合研究所地質調査総合センター地質情報展企画運営事務局

TEL:029-861-3540

E-mail:johoten2017@aist.go.jp

(5) 小さな Earth Scientist のつどい 第14回小, 中, 高校生徒「地学研究」発表会

日本地質学会地学教育委員会では、年会の開催に合わせて、地学教育の普及と振興を図ることを目的に、学校等における地学研究を紹介する「地学研究」発表会をおこなっています。本大会でも、小・中・高等学校の地学クラブの活動、および授業の中で児童・生徒が行った研究、学校外の研究会において児童・生徒が中心に行った研究などが発表されます。愛媛県内、また四国、さらには全国の児童・生徒の来場をお待ちしています。会場は研究者も発表するポスター会場内に、特設コーナーを用意いたします。同時並行で研究者の発表も行われますので、児童・生徒同士のみならず、研究者との交流もできます。この会を通じて生徒、研究者、市民の交流が進み、地質学、地球科学への理解が深まって、未来を担う小さな地球科学者たちの学習意欲への良い刺激と励みになることを願っております。

1) 日時:2017 年 9 月 17 日(日)9:00～15:30

2) 場所:愛媛大会ポスター会場(大学会館 3 階)

参加予定校(18 校, 22 件)

- ・ 愛媛大学附属高等学校
- ・ 愛媛県立西条高等学校地学部
- ・ 愛媛県立宇和島東高等学校地学部
- ・ 愛媛県立今治北高等学校
- ・ 愛媛県立今治東中等教育学校
- ・ 香川県立観音寺第一高等学校
- ・ 東京学芸大学附属高等学校
- ・ 早稲田大学高等学院理科部地学班
- ・ 武蔵高等学校中学校
- ・ 群馬県立太田女子高校理科研究部
- ・ 新潟県立高田高等学校
- ・ 愛知県立岡崎高等学校
- ・ 滋賀県立彦根東高等学校 SSH 課題研究
- ・ 学校法人奈良学園奈良学園高等学校
- ・ 兵庫県立加古川東高等学校自然科学部地学班
- ・ 兵庫県立西脇高等学校地学部

- ・ 熊本県立熊本西高等学校地学部
- ・ 熊本県立天草高等学校科学部

問い合わせ・申込先:

日本地質学会地学教育委員会(担当 三次)

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル 6F

TEL:03-5823-1150 FAX:03-5823-1156

e-mail:main@geosociety.jp

4) 特筆すべき個人, 団体の学術発表(資料2-5)

- (1) 熊本地震日奈久断層帯が過去に高頻度で活動し, 隣接区間も同時に活動した可能性の発見(宮下由香里ほか)
- (2) 首都の最重要機能を移転するなら, どこへ (趙 大鵬)
- (3) 南大洋の古海洋変動ダイナミクス研究の最近の進展 (池原 実)

*このほか, 注目すべき発表をセッション世話人により推薦しました「ハイライト」.(資料5)

5) 連絡先:

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 (社)日本地質学会事務局

電話 03-5823-1150 ファックス 03-5823-1156

e-mail main@geosociety.jp

URL <http://www.geosociety.jp>

担当理事:坂口有人(083-933-5764)

【一般社団法人日本地質学会の概要】

1893(明治 26) に東京地質学会として創立され, 1934(昭和 9) に日本地質学会へと改称. 2008(平成 20) より一般社団法人日本地質学会となりました. 本会は, 研究者, 教員, 技術者, 学生, 生徒, 地質愛好者など約 3700 名が所属し, この分野を包括し, 日本の地球諸科学関連学協会の中で最大規模の学会です. 学問の振興と社会の発展に寄与・貢献することを目的として, 学術誌「地質学雑誌」(年12回)と欧文誌「Island Arc」(年4回)の刊行, 学術大会の開催, そのほか様々な普及教育活動を全国で行っています.

【学術大会】

毎年秋に開催される研究学術成果講演会であり, 開催地を移しつつ全国各地で行われ, 例年約600件の講演を含めて約1000名弱が参加します. 研究者の講演と同じ会場内で小学, 中学, 高校生の児童生徒による研究発表会である「小さな Earth Scientist のつどい」も開催されています. また同時に会員向けおよび教員向けに開催地周辺の地質を現地討論する見学旅行も行われます. 国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質調査総合センターと共催で, 地質情報展や普及講演会等も大会に合わせて開催しています. 学術学会の大会でこれほどの規模で教育普及イベントを同時開催し, それを全国各地で実施している学会は他に類を見ません.

【地質情報展】

1997 年より毎年地質学会学術大会に合わせて開催され, 今回で 20 回目となります. 地質のトピックや開催県の地質に関するパネル・標本展示のほか, 地学に関するいろいろな実験や観察の体験コーナー, 市民向けの講演会が用意されます. 各展示コーナーでは研究者が解説を行い, 見学者は研究者に直接いろいろな質問をすることができます. ここ最近の実績では三日間の会期中に約二千人の市民の皆様に来場頂いております.

熊本地震日奈久断層帯が過去に高頻度で活動し、
隣接区間も同時に活動した可能性の発見

発表者:宮下由香里・東郷徹宏・吾妻 崇・白濱吉起(産総研)・亀高正男・酒井 亨・鈴木悠爾・杉田匠平・松浦
一樹((株)ダイヤコンサルタント)

発表場所: ポスター会場(大学会館3階)

発表タイトルとセッション: 「熊本地震日奈久断層帯の古地震履歴」 (R15. テクトニクスセッション)

発表日: 9月18日(月祝)13:00~14:20(コアタイム)

【概要】

2016年熊本地震は、ふたつの活断層帯が近接する場所において震度7の大地震が2回発生したのを皮切りに、阿蘇地方から大分西部にかけて地震域が拡大した点が大きな特徴です。断層同士が互いに影響を与え合う現象は不明な点が多く、世界の研究者が注目しています。

本発表では、2016年熊本地震の影響で地震を起こしやすくなったと考えられている日奈久断層帯の日奈久区間におけるトレンチ調査の結果を報告します。調査により、過去6回分の断層活動の痕跡が見いだされました。これは、同区間が従来の知見より高い頻度で活動してきたことを意味します。そのうち最新の活動は、北東側に隣接する高野-白旗区間(2016年熊本地震の震源断層のひとつ)と同時期であった可能性があることが新たに示されました。これは、日奈久断層帯の区間分けや、布田川断層帯との古地震履歴の比較を通じて、隣接する活断層帯の地震発生ポテンシャル評価を行う上で重要な成果です。

問い合わせ先:

・産業技術総合研究所地質調査総合センター研究戦略部研究企画室

<https://www.gsj.jp/inquiries/index.html#gsj>

メール gweb@gsj.jp 電話 029-861-3540

・発表者:宮下由香里

メール yukari-miyashita@aist.go.jp

電話 029-861-2400(職場モバイルです)

首都の最重要機能を移転するなら、どこへ

発表者：趙 大鵬(東北大学, 地震・噴火予知研究観測センター)

発表場所：第1会場(南加記念ホール)

発表タイトルとセッション：「地震波トモグラフィーから見た西南日本と吉備高原」(T3. 変動帯日本列島内安定陸塊の探査 セッション)

発表日：9月18日(月祝) 16:45

【概要】

首都の最重要機能を移転するならば災害の少ない場所が望ましいでしょう。日本列島は変動帯に位置しており、地震や火山噴火など活動的な場所が多々あります。そのなかでも安定な陸塊は存在するのか、あるならばそれはどこなのか、地震波トモグラフィーによって西南日本弧の地下構造を詳細に検討しました。地震波の伝わる速さおよび地震波の吸収の仕方などから、吉備高原域は地下20kmまで“固い”一枚岩盤からなっていることが明らかになりました。この吉備高原域は東京都より圧倒的に広い地域でありながら、地質学・地理学・地形学的にも長期安定な陸塊と言えるでしょう。もしも首都の最重要機能を移転するならば、安全・安心な最有力候補と言えるでしょう。

【用語】

地震波トモグラフィー：地震波から地球の内部構造を三次元的に解析する観測手法

長期安定陸塊：最近の地殻変動が少なく、今後も安定的に存在すると考えられる大規模な地質体

問い合わせ先：

趙 大鵬(東北大学, 地震・噴火予知研究観測センター)

電話 022-225-1950, 携帯 090-7784-2283

メール: zhao@tohoku.ac.jp

南大洋の古海洋変動ダイナミクス研究の最近の進展

発表者: 池原 実(高知大学海洋コア総合研究センター)

発表場所: 第 4 会場(共通講義棟 A24)

発表タイトルとセッション: 「南大洋の古海洋変動ダイナミクス研究の最近の進展」(R8. 海洋地質セッション)

発表日: 9 月 17 日(日)10:30

【概要】

人為的な気候変動が大きな社会問題になっています。地球環境は地質時代を通じて大きく変動し続けてきており、天然の変動システムの理解なしに、人為的影響の評価はもとより、将来を予測するのは困難です。南大洋は地球表層にとって、熱と CO₂ の巨大なリザーバであり、地球規模の気候変動を理解する要であると認識されています。今年度より新学術領域研究「熱－水－物質の巨大リザーバ: 全球環境変動を駆動する南大洋・南極氷床」が始まりました(領域代表: 川村賢二)。そのなかの南大洋の古海洋変動ダイナミクスの国際共同研究は、南極底層水や海氷生態系、南極アイスコア、東南極氷床変動、気候モデルなどを統合して、鮮新世から第四紀の様々な時間スケールにおける南大洋・南極氷床の変動とその将来予測を目指すものです。このテーマは、国際的にも注目されており、IODP(国際深海科学掘削計画)でも南極海の掘削が複数計画されています。この分野の世界と日本の研究動向を紹介します。

問い合わせ先: (注)9/15 まで海外出張のため、メールもしくは携帯にお問い合わせ下さい。

池原 実(高知大学海洋コア総合研究センター)

電話 088-864-6719 携帯 090-2828-5529

メール ikehara@kochi-u.ac.jp

シンポジウム・セッションハイライト

それぞれのシンポジウム・セッションがより盛り上がることを期待して、また、会場で学術大会に不慣れな方（学生など）にわかりやすく情報を提供し、おもしろいサイエンスにひとつでも多く接してもらうことを目的に、「おもしろそう、注目すべき、ぜひ聞いてほしい」発表を世話人を選んでいただき、わかりやすく紹介いただきました。

ハイライトは、本プログラム記事のほか、学会 HP と講演要旨集に掲載し、さらに学会プレス発表時に報道機関に配布いたします。何らかの理由で学会のプレス推薦候補にならなかった優れた研究が埋もれているかもしれません。そのようなもののできるだけ発掘し、より多くの学術情報を提供したいと考えます。

今大会では1件のシンポジウムと35件のセッション（トピック、レギュラー、アウトリーチ）が開催され、550題を超える発表が行われる予定です。このハイライト情報はきっと皆様のお役に立つと思います。日本最大の「地質学の祭典」をお楽しみください。

2017年8月
日本地質学会行事委員会

講演番号・ 発表日時・会場	発表者 氏名	発表タイトル	紹介文	キーワード
T1. 文化地質学（一般公開）				
T1-O-2 17日（日）9:00 第1会場（南加記念ホール）	川辺孝幸	山形県小国地域周辺の「大蛇伝説」と斜面崩壊・天然ダムの形成	山形県小国地域に伝わる「大蛇伝説」は、斜面崩壊が川を堰き止めて天然ダム湖をつくる要素があり、全国的に珍しい伝説である。では本当に、小国地域で天然ダム湖ができたことがあったのだろうか？発表者と山形県立小国高等学校の生徒たち（総合学習）の努力によって、縄文時代草創期以前ではあるが、小国盆地が湖になったことがあることが実証された。	大蛇伝説、山形県立小国高等学校、総合学習
T1-O-5 17日（日）9:45 第1会場（南加記念ホール）	石橋 隆 ほか4名	石見銀山に遺された江戸時代の鉱石および鉱物標本	石見銀山で江戸時代に採掘された鉱石の標本が島根県太田市大森で発見された。山師（鉱山経営者、技術者）の高橋家に伝えらものである。その24点の包装和紙に名称・採取場所・採取日・品位などの情報が記載されており、極めて貴重な標本である。これら標本のX線粉末回折（XRD）や電子顕微鏡でのエネルギー分散型X線分光（SEM-EDS）による鉱物種の同定結果などが報告される。	石見銀山、鉱石標本、江戸時代
T1-O-9 [招待講演] 17日（日）10:45 第1会場（南加記念ホール）	藤田勝代	ジオ鉄の取組み－9年目の普及活動と新たなアプローチ	四国は「ジオ鉄」発祥の地。「ジオ鉄」とは、「鉄道を利用しながら沿線に広がる自然を楽しむ旅を通して、地球の成り立ちと大地の変化に想いを馳せること」。招待講演では、これまでのジオ鉄路線（JR四国土讃線、土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線、JR四国予土線、土佐くろしお鉄道中村・宿毛線など）と「三陸鉄道ジオ鉄マップ」の取組みが話される。	ジオ鉄、四国、三陸
T1-O-10 [招待講演] 17日（日）11:15 第1会場（南加記念ホール）	波田善夫	地質が導く地形・植生と地域社会	発表者は岡山理科大学『岡山学』研究会の初代会長である。『岡山学』では、岡山という一つの地域に焦点をあて、自然科学・人文科学・情報科学の分野を統合して総合的に検討する試みが続けられている。招待講演では、これまでの地質と植生の関係に関する解析に立脚し、岡山県の堆積岩地域と花崗岩地域にスポットを当て、地質が地形・植生・農業・地域社会に与えた影響が話される。	地質、地形、植生
T2. 最近の鬼界カルデラ研究の成果と今後の課題 [共催：火山学会、提案：火山部会]				
T2-O-2 17日（日）14:45 第5会場	松本亜希子 ほか4名	約7300年前の鬼界カルデラ形成噴火（K-Ah噴火）のマグマ供給系	鬼界カルデラで発生した超巨大噴火（アカホヤ噴火）のマグマ溜まりのイメージを、噴出物の詳細かつ網羅的な化学分析により明らかにした研究である。この研究は、大量の珪長質マグマの地殻内での蓄積過程やその噴出過程など、いまだに解決されていない火山学上の大きな問題を解くためのヒントを与えてくれる可能性があり、注目すべき成果である。	鬼界カルデラ、噴出物、マグマ供給系
T2-O-8 17日（日）16:15 第5会場	大岩根尚	三島村ジオパーク	人口360人程度の鹿児島県三島村は、鬼界カルデラを元に世界最小ジオパークとして、2016年に日本ジオパークになった。大岩根さんは元々地質屋で、陸上・海底構造学など目で、地質の素晴らしさを村人や役場の人々に伝授し、自然界に見られる素晴らしいジオと人々の生活との一体感を世に知らしめた人物である。ジオを学んでいない人々へ、ジオを普及するノウハウを語ってくれるはずである。	鬼界カルデラ、薩摩硫黄島、ジオパーク
T2-O-9 [招待講演] 17日（日）16:30 第5会場	杉山真二	鬼界カルデラ噴火（7.3ka）が南九州の植生および人類に与えた影響－植物珪酸体分析による検討	鬼界アカホヤ噴火に伴う幸屋火砕流は、薩摩半島南部や大隅半島南部に到達し、鬼界アカホヤ火山灰は東北地方南部にまで分布している。植物珪酸体分析によるこれまでの研究では、火砕流が及んだ地域とそれ以外で植生破壊や回復過程に大きな差異が認められている。この講演では、火砕流の分布域を中心に、鬼界アカホヤ噴火が南九州の植生および人類に与えた影響について、分かりやすくご紹介頂く予定である。	鬼界カルデラ噴火、鬼界カルデラ噴火、植物珪酸体分析

T2-O-10 [招待講演]	柴畑光博	鬼界カルデラ噴火後の激甚被災地における再定住プロセスの研究	鬼界アカホヤ噴火では、九州本土南部まで到達した大規模な火砕流によって縄文人の生活に多大な影響をもたらしたことが知られている。この招待講演では、幸屋火砕流堆積物の分布範囲とその周辺における噴火後の遺跡を集成し、縄文時代早期末～前期前半の土器型式編年をもとにした各段階の遺跡の内容と分布状況を検討して、噴火による激甚被災地における人類の再定住プロセスの復元過程について、分かりやすくご紹介頂く予定である。	鬼界カルデラ噴火、再定住プロセス、土器型式編年
T2-O-12	辻 智大 ほか6名	四国南西部沿岸、宿毛コアにおいて確認されたアカホヤ火山灰とそれに関連したイベント堆積物 [速報]	最近、南九州では、7300年前の鬼界カルデラ噴火に伴って放出された噴出物の直下に、粗粒なイベント堆積物が報告されており、これらは鬼界カルデラ噴火に関連した津波痕跡であった可能性が示唆されている。しかしその影響範囲については、未だによくわかっていない。本講演では、辻が四国南西岸域の宿毛平野において新たに発見したイベント堆積物の概要が報告される予定である。	宿毛平野、鬼界カルデラ噴火、津波痕跡を示唆するイベント堆積物
T 3. 変動帯日本列島内安定陸塊の探査 [共催：NPO法人地球年代学ネットワーク]				
T3-O-2	鈴木茂之・田中 元	古第三系吉備層群の古流路復元から推測される吉備高原の長期安定性	吉備高原域に点在する山砂利層の地質学的及び年代学的研究から古第三系吉備層群とした発表者等は変動帯日本列島内に安定陸塊の存在を初めて示した。吉備層群とは日本海拡大以前に東アジア大陸に存在した河川の化石であり、本セッションを計画する切っ掛けとなった研究である。本講演はこれまでの成果を新たに纏め直し、吉備高原の長期安定性を議論している。	山砂利層、古第三系吉備層群、河川の化石
T3-O-6	柳田 誠	吉備高原の準平原に関する地形学的な再検討	吉備高原域の面積は東京都の面積を超える。その地形学的研究から隆起速度を見積もった、中新世（1500万年頃）以降の平均隆起速度は0.03mm/y程度であった。第四紀では若干速度が上昇しているがそれでも0.1 mm/y程度である。日本の山地では最低級であり、安定大陸並みである。地質学的事実から明らかになった吉備高原安定陸塊説を支持する結果である。	地形学、隆起速度、吉備高原安定陸塊
T3-O-7 [招待講演]	松多信尚	活断層分布と活動度からみた吉備高原の安定性	吉備高原及びその周辺の活断層分布及び活動度を検討した。活断層は4と少なく、地震活動は低調である。最も東側にある山崎断層が西暦868年に活動したと思われる地震以外は活断層と関連した被害地震は知られていない。山崎断層は北西～南東走向の左ずれ断層（約1mm/千年）であるが、地形的な証拠から活動的でないと判断される活断層しか分布していない。吉備高原域は直下型地震の災害リスクは小さいと言える。	活断層、活動度、直下型地震
T3-O-10	乙藤洋一郎	吉備高原は大陸から来たか	日本列島の観音開きテクトニクスを古地磁気学的研究から提唱した発表者は吉備高原陸塊を構成している地質体（ペルム紀～白亜紀）の古地磁気測定を実施した。結果、東振り42～100度（平均65度）の偏角値を記録していることを突き止めた。これは吉備高原も時計回り回転運動を経験したことを示し、日本海の拡大に伴って西南日本弧の一員として吉備高原も移動したとされる。	古地磁気学、時計回り回転、日本海拡大
T 5. 三次元地質モデル研究の新展開				
T5-O-1 [招待講演]	西山昭一 ほか	建設関連業における3次元地質解析技術の実践と展望	国交省が推進する土木・建設分野のCIMの急速な展開において、地質・地盤の3次元地質解析技術やその品質の規格化が課題となっている。本講演は、この諸課題について、全地連において今年3月に設置された3次元地質解析技術コンソーシアムでの検討内容も含めて講演していただく。講演者は、地質関連業界で3次元地質モデル化業務を実践されている第一人者であり、土木・建設分野の実務の流れを踏まえた実践的なお話を聞くことができる。	CIM、3次元地質解析技術コンソーシアム、3次元地質モデル
T5-O-4 [招待講演]	藤井哲哉 ほか2名	東部南海トラフ第二渥美海丘周辺におけるメタンハイドレート濃集過程の三次元モデリング	本講演は、現在新たな近海資源として脚光を浴びている東部南海トラフにおけるメタンハイドレートの生成濃集過程を、三次元地質モデリング手法によって明らかにする試みについて解説戴くものである。本手法は、震探および坑井データ等あらゆる詳細地質情報による三次元地質モデルの構築のほか、炭化水素の生成、移動、集積、メタンハイドレートの濃集といった一連の時間軸プロセスをシミュレートしており、モデリング手法の最先端として注目に値する。	メタンハイドレート、三次元地質モデリング、炭化水素生成
T 6. 極々表層堆積学:「堆積物」への記録プロセスの理解 [提案：現行地質過程部会]				
T6-O-1	菊地一輝・成瀬 元	生痕多様性に影響する露頭面積バイアスの補正方法：堆積環境変化に伴う生痕多様性変動の検討	過去の海底底生生物の活動を記録する生痕は、その多様性や擾乱の程度から堆積時の古環境を推定することができる。しかしながら、露頭調査では、各地点で観察可能な露頭面積が異なるため、本来の多様性以外に露頭の広さによるバイアスがかかる。本研究では露頭面積バイアスを克服しうる生痕多様性評価方法を新たに提案し、その手法を用いて日南層群猪崎オリストリスの海底チャネルーレービシステムでの生痕の多様性変動を検討した。	生痕、露頭面積バイアス、日南層群猪崎オリストリス

T6-O-3 16日(土) 9:30 第8会場	小栗一将 ほか6名	組み込みマイコンを用いた深海底の同時時系列観測	深海底での生態系や堆積現象などの深海環境の変化・応答を直接観察するため、長期計測可能・安価な自作計測カメラシステムを作成した。本発表では、普段、海底下構造探査に使用している海底地震計に取り付け、日本海溝大陸斜面で調査を実施した例を紹介し、本装置を用いた深海底の長期・多点時系列観測の可能性について議論する。	深海底、長期計測カメラシステム、海底地震計
T6-O-4 [招待講演] 16日(土) 9:45 第8会場	池原 研	海底への堆積物の供給と堆積・再移動・溶解	一度、堆積すると安定して変わらないように見える海底堆積物も、極表層での堆積物の再移動・再堆積や溶解などの複雑な過程の影響を受けている。本講演では、海底に堆積する堆積物の供給・堆積、堆積後の再移動・溶解の過程について、日本周辺で採取された様々な海底堆積物の観察・分析例を基に紹介する。	極表層での堆積過程、再懸濁、選択的溶解
T6-O-6 [招待講演] 16日(土) 10:30 第8会場	長尾誠也	福島沿岸域堆積物における放射性セシウムの移行挙動	平成23年3月に発生した福島第一原発事故後の放射性セシウムの動態と支配要因を把握するため、河川・湖沼・沿岸域を対象にした観測を実施した。本講演では、沿岸域での堆積物の移動と沈着過程について、表層堆積物の時系列観測・セジメントトラップ実験を実施し、炭素同位体比も活用して福島原発事故由来の放射性セシウムの動態解析を検討した結果を紹介する。	放射性セシウム、時系列観測・セジメントトラップ実験、炭素同位体比
T7. スロー地震の地質学				
T7-O-1 [招待講演] 17日(日) 9:15 第3会場	小原一成	スロー地震の多様性と地質学的背景	発表者は地震学者で、スロー地震研究の第一人者である。講演ではまず、西南日本を例にスロー地震が時定数の違いによってどのように分類されるのか紹介して頂き、次に、沈み込み帯における様々な時空スケールでのスロー地震の多様性について、具体例を挙げながら提示して頂く。そして、スロー地震を支配する地質学的環境の解明にける期待を述べて頂く。スロー地震の地質学を推進する上で必聴の講演。	スロー地震、沈み込み帯
T7-O-5 [招待講演] 17日(日) 10:30 第3会場	Ake Fagereng	Rheology of the slow earthquake source: geological constraints from the Damara Belt, Namibia	発表者は、スロー地震の地質学研究をリードする研究者で、これまでNature Geoscienceなどの著名な学術誌に数多くの論文を公表している。講演では、後生変形の影響をあまり受けずに沈み込み帯深部の岩石が露出するナミビアのDamara帯を対象として、フィールド調査に基づいて導き出された深部episodic tremor and slipの地質学的描像について詳しく紹介して頂く。世話人お勧めの講演。	Episodic tremor and slip, Damara Belt
T9. 「泥火山」の新しい研究展開に向けて [提案：現行地質過程部会]				
T9-O-2 [招待講演] 18日(月) 10:00 第5会場	中野 優	海底地震津波観測網DONETによる熊野灘の泥火山シグナル検出に向けて	泥火山研究に新しいデータソースが加わりうる瞬間をご案内したい。JAMSTECが熊野海盆から四国沖にかけて展開している地震・津波観測監視システム(DONET)は地震動や水圧等のデータを取得している。熊野海盆の泥火山のうち東側に分布する一部はDONET敷設海域に重複するので、DONETがそれら泥火山の微細な活動を捉えていると考えられる。本講演ではDONETが取得するデータとその利用方法、泥火山活動に伴うシグナル検出の試みなどをご紹介いただく。	熊野海盆、DONET、泥火山シグナル
T9-O-5 [招待講演] 18日(月) 11:00 第5会場	中田亮一 ほか3名	泥火山から採取した原油の希土類元素地球化学	中田亮一氏は新進気鋭の若手地球化学者で、水圏の希土類元素(REE/レアアース)やその他の化学物質の挙動に関する研究など、多岐にわたるフィールドで活躍されている。本講演では、泥火山から噴出する泥・水・気体の化学分析による泥火山の地化学的特徴解明に始まり、一緒に噴出した原油中のREEの分析によって原油の生成過程や熟成度に関する研究テーマに発展した、一連の研究例をご紹介いただく。	泥火山、原油、希土類元素
R2. 岩石・鉱物・鉱床学一般				
R2-O-1 [招待講演] 18日(月) 14:30 第4会場	山田亮一	黒鉱鉱床の概要と変質帯の時空間分布	黒鉱鉱床は日本を代表する金属鉱床であり、現世の海底熱水鉱床のアナログだと考えられている。長年、黒鉱探査に関わられてきた山田亮一氏による講演。黒鉱探査で得られた時空間能の高い地質データに基づき、炭素同位体・微量元素組成による熱水活動の分布の制約など、最新の成果についてご講演頂く。	黒鉱鉱床、海底熱水鉱床、熱水活動
R2-O-2 18日(月) 15:00 第4会場	福山繭子 ほか2名	埼玉県寄居地域のヒスイ輝石石英岩中の流体包有物の化学組成とその特徴	ヒスイ輝石は高压変成作用で生成される特徴的な岩石であり、沈み込み帯深部の岩石～流体反応を記録していると考えられている。本講演では、ヒスイ輝石石英岩の流体包有物をLA-ICP-MSで分析し、その組成・起源を明らかにされた。深部流体組成の貴重な直接的な観測であり、沈み込み帯の水循環を解明する重要な手がかりとなると期待される。	ヒスイ輝石、交代作用、流体組成
R2-O-3 18日(月) 15:15 第4会場	桑谷 立	岩石学分野におけるデータ駆動型解析の現状と展望	データ駆動型解析は、取得データの中から最大限に情報を抽出するための強力なデータ解析手法であり、近年その手法群の発達に伴い、様々な自然科学や工学分野において適用されてきている。桑谷氏は、データ駆動型解析の地球科学・岩石学分野への適用を進めてきた先駆者の一人である。本講演では、現在進行中のさまざまな研究例を紹介するとともに、岩石学におけるデータ駆動型解析に関する今後の展望についても講演される予定である。	データ駆動科学、逆問題、バイス確率論

R2-O-5 18日(月) 16:00 第4会場	道林克禎 ほか4名	最上部マントルのファブリックと化学組成～ 陸と海のかんらん岩の 類似性と相異性～	かんらん岩はマントルを構成する主要な岩石であり、その理解はマントルのダイナミクスを理解する上で重要である。本講演では、陸上に露出するかんらん岩の代表例であるオマーンオフィオライトと、前弧起源のマリアナ弧蛇紋岩海山のかんらん岩を、鉱物組成および結晶方位解析から比較検討して、その相違を明らかにされた。オマーンオフィオライトの起源、そして最上部マントルの構造を考察する上で重要な知見が得られると期待される。	最 上 部 マ ン ト ル、 かんらん石 ファブリック
R 4. 変成岩とテクトニクス				
R4-O-3 17日(日) 9:30 第6会場	森 祐紀・ 池田 剛	東南極リュツォ・ホル ム岩体に産するコラン ダムと角閃石の間に発 達する3層構造コロナ: 物質移動と組織発展	南極の高温変成岩中に見られる、コランダムの周囲に発達するコロナ形成反応を化学量論的に解き明かし、反応時の成分移動方向を定量的に議論した仕事である。減温減圧期に形成された組織の解析には困難が伴うが、本研究では移動成分と不動成分を丁寧に切り分けることで解析を行っており、コロナ形成反応が大きな体積増大反応であることを突き止め、反応が時計回りP-T経路の減圧過程で起こったことも明らかにした。	化学量論、コロ ナ状組織、南極
R4-O-4 17日(日) 9:45 第6会場	河上哲生 ほか2名	中央ネパール高ヒマラ ヤ片麻岩類のザクロ石 に包有されるナノ花崗 岩包有物	近年高度変成岩類における部分溶融の直接的な証拠として注目を集めるナノ花崗岩包有物を、中央ネパールのFormation特内の2地点から新たに見出し、その地質学的意義を検討した研究。特にナノ花崗岩包有物に電気石が含まれることは、ヒマラヤに多産する含電気石優白質花崗岩がFormation特の部分溶融によって形成されたことを支持するため重要である。	ナノ花崗岩包有 物、電気石、中 央ネパール
R4-P-11 17日(日) ポスター会場 コアタイム 13:00～14:20	藤瀬武尊 ほか2名	低温超高压エクロジヤ イト中のH ₂ O含有量	タルクと藍晶石を含む超高压エクロジヤイト用いて、地下深部でのH ₂ Oのキャリアと、持ち込まれたH ₂ Oの放出タイミングを、記載岩石学及びpseudosection解析から推定した研究。特に低い地温勾配の沈み込み帯での、ローソン石や藍晶石の消長を、全岩化学組成に於けるH ₂ O量の変化からモデル化している点が興味深い。低温超高压条件下における地質学的研究にとって、意義深い研究である。	超高压変成作用、 H ₂ O、エクロ ジヤイト
R 8. 海洋地質				
R8-O-8 [招待講演] 9月17日(日) 10:30 第4会場	池原 実	南大洋の古海洋変動ダイ ナミクス研究の最近 の進展	池原 実氏は長年にわたって様々な指標を用いた古海洋学的研究を行っており、特に南大洋においてはIODPの掘削提案を行う中心的な役割を果たしている。今後数年間は南極海においてIODPによる掘削航海が立て続けに計画されていることなど、これから注目される研究テーマとして関心が向けられている。池原氏には、南大洋が気候変動に果たす役割について最新の研究成果や国内外の研究動向、今後の課題についてご講演頂く。	南極海、海洋循 環、IODP
R8-O-9 [招待講演] 9月17日(日) 11:00 第4会場	多田隆治 ほか13名	数百～数千年スケール で起こる東アジア夏季 モンスーン変動の開始 時期と時代変化、その グローバル気候変動に おける位置づけ	多田隆治氏は海域および陸域双方の地質記録からアジアモンスーンの進化に関する研究を進め、2013年には自らが代表プロポーネントとして計画された日本海および東シナ海北部のIODP(国際深海掘削計画) Exp. 346に共同主席研究者として乗船した。現在、その成果がまとめられつつあり、そこから明らかにされつつあるアジアモンスーン変動の時代変化や日本海の海洋循環との関係に関する新知見などについてご講演頂く。	アジアモンスー ン、古環境、 IODP
R 9. 堆積物(岩)の起源・組織・組成 [共催: 日本堆積学会, 石油技術協会探鉱技術委員会, 日本有機地球化学会]				
R9-O-1 [招待講演] 16日(土) 11:15 第5会場	宮田雄一郎	碎屑物の粒子形状と定 向配列の計測手法	粒子の形状とファブリック(向き)を記載することは、堆積学の基礎である。しかし、天然の粒子は複雑な形状をしめているので形をどのように評価するのか、または、粒子のファブリックの定量法には定説はなかった。この公演では、粒子の形状とファブリックをデジタル定量化する方法と、その意義が解説される。	粒子形状、粒子 ファブリック、 定量化
R10. 炭酸塩岩の起源と地球環境				
R10-O-1 [招待講演] 18日(月) 14:30 第6会場	浦田健作	カルスト・システム形 成研究における最近 の発展	日本におけるカルスト研究をリードする一人、浦田健作氏による招待講演である。最近のカルスト・システム形成研究の発展について、特に地下カルストと地質学的現象との関係を中心に紹介していただく。また、自身の最近の研究成果もお話いただく予定である。	カルスト・シス テム形成、地下 カルスト、深成 カルスト
R10-O-3 18日(月) 15:15 第6会場	久保貴志	富山県黒部市・鉾ヶ岳 から産出する白亜紀の トラバーチン	国会議事堂の階段壁などに使用されており、近年「富山県の岩石」にも指定された「オニックスマーブル」の堆積環境と年代について研究し、同岩石が約一億年前の白亜紀に温泉環境で堆積した炭酸塩岩、トラバーチンであると結論している。	オニックスマー ブル、トラバー チン、富山県
R10-P-1 18日(月) ポスター会場 コアタイム 13:00～14:20	増井 充 ほか4名	前期/後期石炭紀境界 付近の秋吉石灰岩層群 で見られる層孔虫様生 物と礁構造の多様性	前期/後期石炭紀境界付近における秋吉石灰岩層群の各堆積場で生物の役割を、特に礁の枠組みを構築する様々な生物に着目して、詳細に観察・記載した研究成果が示される。今後、さらなるデータが蓄積されれば、堆積当時の海洋環境が詳細に復元されるであろう。	秋吉石灰岩層 群、枠組み構築 者

R11. 堆積過程・堆積環境・堆積地質				
R11-O-1 [招待講演] 17日(日) 16:00 第8会場	成瀬 元	混濁流のダイナミクス：研究の動向と今後の展望	この講演はこのセッションの招待講演である。過去およそ10年間に進展した混濁流の観測事例、数値計算に基づく理解の進展がこの講演で紹介される。さらには講演者が思い描く、今後の研究の方向性が語られる。重力流やその堆積物の研究者、これからその研究に取りかかろうとする若手の方々にとって、まさに「必修」の講演である。	混濁流、現場観測、モデル計算
R11-O-6 17日(日) 17:30 第8会場	奈良正和	日本海拡大と西南日本弧の古生態系：中新統三崎層群における海底生態系の特異性とその要因	この講演では、高知県の中新統三崎層群の生痕化石から復元した古生態系の特徴と日本海拡大時の西南日本前弧側のテクトニクス・堆積作用との関係が議論される。日本海形成イベントが生態系にどう影響をしたのか、講演会場では活発な議論が期待される。奈良氏が案内人となる巡検の事前学習としても重要な講演である。	三崎層群，日本海拡大，古生態系
R11-P-1 17日(日) ポスター会場 コアタイム 13:00～14:20	石原与四郎・弓 真由子	フルートマーク発達過程の定量化	フルートマークはよく知られた侵食構造である。このポスター発表では侵食構造の微小地形から、流れの特徴を復元するために、フルートマークを数値化・定量化解析した成果が報告される。具体的には統計的手法を用いてフルートマークの形、配置を評価、方向微分による未侵食面を評価する。露頭からより詳しい過去の流れの情報を得るための新たな手法が紹介される。興味深い発表である。	フルートマーク，重力流，定量化
R13. 岩石・鉱物の変形と反応				
R13-O-1 [招待講演] 16日(土) 9:15 第2会場	内出崇彦	地震学的手法による断層状態推定への挑戦	内出氏の講演では、微小地震から大地震まで規模の異なる多くの地震データの解析によって地震の性質を多様な観点からとらえた研究成果をご紹介いただく。「地殻の強度や地殻にかかる応力」を地震学の観点からどのようにして推定するか、この講演を見逃すな！	地震発生，地殻強度，応力
R13-O-10 [招待講演] 16日(土) 12:00 第2会場	増田俊明	マイクロブーディン応力—歪解析：現状と今後の方向性	増田氏の講演では、理論、実験、天然の解析と多岐に渡る研究成果から、天然の岩石から変形の各要素を読み取る手法の現状と展望についてお話いただく。増田氏の講演を聞いて、2011年東北地方太平洋沖地震後に浮かび上がった新たな問題、「地殻の変形と応力状態」について考えよう！	マイクロブーディン，岩石変形，応力
R14. 沈み込み帯・陸上付加体				
R14-O-1 [招待講演] 17日(日) 14:30 第3会場	山本由弦 ほか	沈み込み帯浅部の構造的特徴：室戸沖南海沈み込み帯と房総半島付加体	沈み込み帯浅部へのアクセスは、深海掘削または陸上に露出する浅部付加体に委ねるしかない。講演者は、昨年実施された室戸沖南海トラフ沈み込み帯先端部掘削に乗船参加した。また、伊豆弧の本州弧への衝突によって浅部付加体が露出する房総半島南部保田付加体を対象とした構造地質学的研究を行ってきた。講演ではこれまでの研究成果を紹介して頂く。プレート沈み込み帯浅部における変形の特徴や実態を理解する上で必聴の講演。	室戸沖南海トラフ，保田付加体
R14-O-8 [招待講演] 17日(日) 16:30 第3会場	岡本 敦	シリカ析出と流体移動・石英アモルファスと鉱物脈	講演者は、これまで超臨界状態におけるシリカの水熱実験や石英脈の組織観察・解析に基づき、シリカの析出による地殻内透水不透水境界の形成や亀裂閉塞、過飽和度の違いに対応した石英脈組織形成など数々の興味深い成果を上げられてきた。これらの成果は、地殻内における過剰間隙水圧の発生、断層強度回復、スロー地震との関連性を考える上でも示唆に富む参照すべき成果であるといえる。世話人お薦めの講演。	シリカ，水熱実験，超臨界状態
R15. テクトニクス				
R15-O-5 [招待講演] 18日(月) 9:45 第3会場	大坪 誠・Jeanne L. Hardebeck	メソスケールの構造から推定される沈み込み帯巨大分岐断層沿いの応力、間隙流体圧、岩石強度	地震を引き起こすような断層における力学を考える上で、岩石強度、地殻応力と流体の関係を理解することは重要である。しかし、現在地震が発生しているような深部において、直接地殻応力と流体の関係を捉えることは困難を極める。本講演では、過去に地震を引き起こしていた延岡衝上断層周辺に残された鉱物脈を鍵に、地震発生断層における岩石強度、地殻応力と流体の関係を紐解く。	巨大分岐断層，地殻応力，間隙水圧
R15-O-14 [招待講演] 18日(月) 15:00 第3会場	北佐枝子 ほか2名	西南日本の地震波減衰構造とスロー地震・地震テクトニクス的な検討-	テクトニクスに取り組む上で、地表付近で観察される情報からだけでなく、地球物理学的手法などを用いて、地球内部で進行中のダイナミクスも総合して理解する必要がある。本講演では、最近の西南日本における地震波減衰構造の研究成果について紹介する。特に、本講演で紹介する地震波減衰構造から、近年注目されるスロー地震の発生域の状態について紹介される。	地震波減衰構造，西南日本，スロー地震
R15-P-4 18日(月) ポスター会場 コアタイム 13:00～14:20	杉山幸太郎 ほか5名	長野県伊那地域の中央構造線における活断層の認定	伊那地域の中央構造線が活断層である証拠の報告である。本地域の中央構造線は変位地形が不明瞭であり、第四紀後期の活動性は明確には知られていなかった。講演者らは、露頭観察やテフラ分析により、約10万年前以降の右ずれ変位を認定した。大規模プロジェクトや高額な機器による大掛かりな研究が幅を利かせる昨今、地道な野外調査と古典的な分析により従来の知見を覆す発見をした点は評価に値する。	中央構造線（伊那地域），活断層，テフラ分析

R15-P-13 18日（月） ポスター会場 コアタイム 13:00～14:20	佐藤活志・ 宮川歩夢	地震の発震機構解による応力逆解析と摩擦係数決定および節面選択	発震機構解を用いた2つの新たな応力逆解析新手法の提案である。発震機構解を応力逆解析に用いる際の難点は、2つの節面のどちらが真の断層面か不明な点である。一つ目の方法では、発震機構解の適合領域の重ね合わせから最適な応力テンソルを推定し、節面選択を不要とした。もう一つの方法では、断層面の方位分布から推定した摩擦係数を基に節面選択を行った。発震機構解を用いた応力逆解析手法の実践的な方法論である。	応力逆解析、発震機構解、節面選択
R18. 情報地質とその利活用				
R18-O-1 17日（日）16:15 第4会場	富樫 均 ほか2名	長野県デジタル地質図2015を使った斜面崩壊発生確率モデルの高度化	地質は防災・環境・産業など多分野に関わりをもつ基礎情報である。とくに『地質図』として整理された情報は、地域評価に活用しやすい。また、デジタル化されることにより地質情報の応用範囲が広がる。セッションでは、新しく整備された県レベルのデジタル地質図のデータをもとに広域的な斜面崩壊発生確率を求める予測モデルを改良し、それにより長野県における土砂災害リスク予測評価の精緻化をすすめた例を紹介する。	デジタル地質図、斜面崩壊発生確率モデル、長野県
R18-O-3 17日（日）16:45 第4会場	内藤一樹	地質情報のLOD公開と標本データベースにおける利用例	インターネット上の情報を機械的に活用可能とするデータ形式としてLOD（リンクトオープンデータ）が注目されており、産総研からも地質情報のLOD公開が始まった。本発表は、LODを利用したアプリケーションの作成例を通して、LODの有用性を示すものである。様々な情報のLOD化が進むことで、インターネットが一つの大きなデータベースとして活用されるようになることが期待できる。	LOD、標本データベース
R20. 応用地質学一般およびノンテクトニック構造				
R20-O-1 18日（月）14:30 第5会場	山崎新太郎 ほか5名	雪・氷・岩石などれの地質学的特徴	多量に雪または水のある環境下で斜面崩壊が発生すると、移動中に大規模化するとともに長距離移動する場合がある。2011年津南町辰ノ口、2015年ネパール・ランタンでの事例や、斜面崩壊の形成実験をもとに、雪・氷・岩石などの特徴を解明する。	雪・氷・岩石など、長距離移動、形成実験
R20-O-2 [招待講演] 18日（月）14:45 第5会場	奥野 充	阿蘇カルデラ内における熊本地震による表層崩壊	平成28年（2016年）熊本地震では、数多くの斜面変動が発生した。なかでも阿蘇火山近傍では、アースフローと呼ばれる特異な崩壊現象が観測されている。本報告では詳細な現地調査をもとに、アースフローの発生機構や形成履歴を解説する。	平成28年（2016年）熊本地震、阿蘇カルデラ、アースフロー
R22. 第四紀地質				
R22-P-4 16日（土） ポスター会場 コアタイム 13:45-15:05	潮崎翔一・ 風岡 修	千葉県北西部の沖積層基底面図	浦安市から千葉市にかけての東京湾岸低地において、4905本のボーリング柱状資料を整理して、沖積層基底面深度を表す平面図を作成した成果である。精査された3本のコアを基準として対比された基底面深度の広がり信頼性が高い。埋没谷の規模と深度の局地的な相違も判明している。これらの地質情報は直下型地震の被害予測や対策に有用である。	東京湾岸低地、地震被害予測、埋没谷
R23. 地球史				
R23-O-10 [招待講演] 18日（月）11:00 第2会場	牛久保孝行 ほか6名	局所同位体比分析で地球地殻の形成史を探る	牛久保氏は、マルチコレクター型二次イオン質量分析計（MC-SIMS）を用いた地質・隕石試料分析の第一人者である。彼らの分析手法では、鉍物の酸素などの同位体比を数マイクロメートルの空間解像度、サブパーミルの精度で測定することが可能で、今後も地質学分野での様々な応用が期待される。今回、特に地殻形成プロセスに関して過去の研究や、彼らの新たな成果と今後の展望について紹介してもらう。	二次イオン質量分析、地殻形成プロセス
R23-O-20 [招待講演] 18日（月）16:30 第2会場	亀山真典・ 原田あかり	超大陸サイクルとマントル内熱化学構造の相互関係：2次元マントル対流シミュレーションに基づく考察	松山の巨匠、亀山真典氏が地球史セッションに登壇。せっかくの三連休なのに…とばかり巨匠を半ば強制的に招待し、マントルの熱組成対流に関する二次元数値シミュレーションについて講演していただく。この機会に私たち地質学者も、マントル上昇ブルームとマントル深部の熱化学構造との相互関係や、超大陸サイクルとの関連について理解を深めたい。	マントル熱組成対流、二次元数値シミュレーション
R24. 原子力と地質科学				
R24-O-5 [招待講演] 16日（土）10:00 第6会場	大江俊昭	放射性廃棄物の地層処分人工バリアに何を求めるか	地層処分は、人工バリアと天然バリアの組み合わせによって数万年を超える隔離機能を担保するシステムである。この組み合わせにおいて、人工バリアに期待する働きについて論じる。	放射性廃棄物、地層処分、人工バリア
R24-O-10 [招待講演] 16日（土）11:30 第6会場	小林大和	高レベル放射性廃棄物の地層処分に関する「科学的特性マップ」について	本年公表された、高レベル放射性廃棄物の地層処分に関する「科学的特性マップ」について、その趣旨や科学的事項と要件についての詳細を紹介する。	地層処分、科学的特性マップ